

Wanderlust

伊奈スレ廃墟本

平和な世界

コッ、と音が響いた。わざと音の鳴るように駒を置いた、向かいの相手の顔を見る。いつもの通り不健康で、不機嫌そうな睨み顔がそこにあった。

「お前の番」

こくりと頷き、白のポーンをつまみ上げる。一歩前進。手を戻し、僕はそつと目を伏せる。

極秘施設。二人きりの面会室。壁越しには、記録官や看守が配置についてはいるが、部屋の中には僕らだけ。

どちらも喋らず、駒を動かさなければ全く音はしない。しんとして、時が止まったような錯覚がある。

「界塚」

数秒か、数十秒後。スレインが僕の名を呼んだ。

険しい顔はいつものことだが、碧の双眸が左に、次に右へ泳ぐ。

「……今日のお前は、無口だな」

伊奈帆は右目を丸くした。

「そうかな」

これまで、こんな言葉を掛けてもらったことはない。僕に関する何かについて。

チェスボード、戦況の只中で自陣に迫る黒のナイトがふと見えた。盤上は言葉よりも雄弁だ。

今の僕は、こんなにも無力だ。

伊奈帆が何も言わずにいるのを見つめ、スレインは口を尖らせ、鼻を鳴らす。

「らしくもない。何かあったか？」

肘をつき、斜に構えたぶっきらぼうな姿勢だが、瞳の温度は冷たくはない。

「今日の君は、優しいね」

「馬鹿言え」

そうはいいいつつ、視線はこちらを向いている。伊奈帆はテーブルの上で自分の右手と左手の指を交互

に絡め軽く握った。

嘘を吐きたいわけじゃない。けれど。

「夢を見たんだ」

本当のことは、きっとこの先ずつと言えない。

スレインの眉根に皺が刻まれる。

「どんな夢だ？」

そう問う彼が毎夜見る夢を想像し、伊奈帆は首を左右に振る。

「忘れちゃった。でも、なんか」

君の夢と僕の今の現実とは、どちらの方がマシなかな。その過程には即座に、僕のほうだろうと結論が出る。

伊奈帆はしばし逡巡し、結局はただ思ったことを言うことにした。

「君がここにいてくれて良かった」

この世界には、君がいる。それにどれほど救われているか。

「こうして、チェスも話もできて」

扉の奥に、不貞腐れた顔の彼がいた。はつきり一度こちらを見て、目があった時、なんだか急に気が抜けた。

「ほっとした。だからちよっと、今日は言葉が出てこなくて」

いつもの蘊蓄とは違い、辿々しい言葉で語られる伊奈帆の言葉をスレインは静かに聞いている。

「らしくないかな」

最後そう聞く伊奈帆に向けて、スレインは困ったような笑顔を見せた。

Prologue

Crypt of Omelas 2

監獄

不気味な静けさを壁に感じる。狭い独房の、ベッドの側面が接する壁にもたれ、スレインは目を閉じる。広大な軍用地の一角を占める極秘施設の地下の房。この壁だけが、唯一地上と接している。壁の硬さ冷たさを背に感じ、あまりに微細な振動や、高い格子窓に切り取られた空の色をぼんやり眺め、世界の姿を思い描く。もうずっと、そういうことに慣れていた。

しかし今日はどうも変だ、とスレインは思う。

世界から隔絶されたこの場所はいつもとでも静かだけれど、いつになく様子がおかしい。人の気配がない。機械の音も。そういえば、鳥の鳴き声も聞こえない。風音もない。耳が痛くなるような静寂だ。写真のように全てが静止した中で、自分一人が息をし、生きているかのような錯覚に陥る。

何を馬鹿な、と思わず口を歪ませる。感傷的な思いつき。シニカルな笑みが口元に浮かぶ。

いつかあいつと話した、崩れた壁を思い出す。昔読んだ本をなぞらえ、黒壁の中に猫がいる、と僕が言うときあいつは嬉しそうに笑った。閉じ込められた

黒猫は、塗りこめられた漆喰が固まるまでの長い時間、何度、にやあと鳴いただろう。

いくら鳴いても、誰にも届くことはないのに。

そして、ガチャリと音がした。独房の扉。ロックを外す金属音。ギイ、と耳障りな蝶番の軋み。コツ、と軍靴が床を打つ。全ての音が耳の奥にぐわんぐわんと響き渡り、耳を押さえる。頭がズキズキと痛む。僕は一体、いつから慣れていた？ この途方もない無音に。

「やあ」

無表情で片手を上げるのは界塚伊奈帆。何かと癪に障る相手だが、もう短くもない付き合いだ。いつもと変わらぬ様子にひどく安堵する。

「調子が良さそうだ。珍しいね」

笑った顔を見られたらしい。鼻を鳴らし、スレインは顎を上げる。

「何か用か」

状況のおかしさで、警戒が声に出る。この男とはしょっちゅう会うが、それは全て面会室で、だ。独房まで来たことは一度もない。それがどうも引っかかる。

伊奈帆は軽く頷いた。開く唇は乾いていて、ひび割れに薄皮が浮いている。

「どこに行く？」

何のことだかさっぱり分からず、スレインは伊奈帆をまじまじと見つめる。冗談にしても、意図が見えない。目が慣れてよく見ると、彼の顔色は最悪だった。

「は？」

スレインが息を漏らすと、伊奈帆は背後を振り返り、そして再び顔を戻す。

「誰もいないから」

いよいよ訳がわからない。しかし、いや増す不吉な予感に胸が騒ぐ。

誰もいない？ どこに？ ここに？ さつきからずつと感じていた不気味な静けさの原因は。

「誰もいない、って、どういうことだ？」

スレインは言葉を区切り慎重に聞いた。伊奈帆はそつと目を伏せる。

「世界各地のアルドノア炉が、一斉に暴走した」

やがて隻眼がスレインを見据えた。初めて面会した時のような、真っ直ぐな静かな瞳で。

「地球と火星。月。軌道上の揚陸城と衛星基地」

目の下に隈ができている。やつれた面ざし。これまで見た事がないほど、彼は憔悴していた。

「人類はもう、この世界に誰もいない」

僕と君以外には、と伊奈帆は告げる。

音がする。呼吸の音だ。息を吸う。息を吐く。繰り返す。上手いかわない。スレインは声を出そうとするのだが、上手いかわずに咽せる。咳が止まらず膝をつく。咳を一つするたびに、体がバラバラにならない。冷たい汗が服に染み込む。

また、死に損ねた。

どうしてだろう。そんな身勝手なことを最初に考えた。僕はどれほど愚かなんだろう。

死んだのか。みんな。

この施設の軍人たちも、平和な世界に生きる人も。地球と、月と、火星と。これまで出会った人たちの顔が浮かぶ。怒った顔や、不機嫌な顔が大半だけれど、忘れ難い笑顔や泣き顔もあった。

それら全てが、僕を残していつてしまった。

「げほっ、がっ……、……う、う」

咳が止まらない。苦しくて息を吸おうとするけど、嘔吐くばかりで肘をつく。

『あなたは教えてくれましたよね』

最後に見たのは、泣き顔だ。泣かせてしまった。笑顔が見たかったのに。そのために生きていたのに。

『人と自然は……。地球とヴァースは、共に栄えることが出来る』

濡れた床に額を押し付け、上下する肩を、腕を交差し握りしめる。

『地球では、水や空気に青い色がついているんですよか』

その大切な人が、もういない。その人のためなら、何だってした。何だってできた。世界を変えて、この命とともに捧げたかった。それは叶わなかった。それでも良かった。あの方は、ご自身の意志と力で世界を変える。それには僕は邪魔なんだ。それなのに。

『本当に美しい惑星。何度見ても心を奪われます』
貴女と。貴女がそう言った、世界が先に無くなってしまうのに。
それなのに。

『私は、地球で鳥を見ました』

どうして、僕は生きている？

気がつくのと、背をさする手があった。

「ごめん」

見上げると、伊奈帆が膝をつき、僕を覗き込んでいた。何を謝っているのだろうかと思えば、間に合わなかった、と彼は絞り出すように言った。

「救えなかった」

お前、一体何様だ、と怒りが沸く。何かを救えると考えている傲慢さにも、救われた者になったことのない運命にも。

けれど。

「……君がいて、良かった」

張り倒してやろうかと思っただけで顔と、ぽつりと聞こえたその一言にその意思は失せた。もう何日か、何週間か。何か月か何年か。世界に異変が起きた後、僕が静けさの底にいる間にもこいつは奔走していたのだ、と理解したからだ。

ここ何回かの面会での、沈んだ様子が腑に落ちた。何も言わなかったことに腹も立ったが。

「……もう、大丈夫だ」

咳が止まった。体を起こす。顔中がべたべた。汗で服が張り付いて、悪寒でぶるりと背が震えた。

界塚伊奈帆に向き直る。

「それで、僕に何の用なんだ？」
最初の問いを繰り返す。伊奈帆は頷きこう言った。

「どこかに行こう」

ここではないどこかへ。

スレインは悟る。ああそうか、と。人類はもういない。こいつはさっきいったじゃないか。僕らにとっても、終わりはそれほど先の事ではないのだ。

なら、こいつに付き合うのもいい。

この地下室は、僕はともかくこいつの死に場所としては似つかわしくないと思うから。

スレインは、伊奈帆が伸ばした手を握る。腕を引かれ立ち上がる。強い力だった。

「どこに行きたい？」

薄暗い独房に、高い窓から光が差し込む。弱い光だ。きつと雲が厚いのだろう。ぼんやりとした光の四角。その中に立つ道連れにスレインは応える。

「どこでも同じだ」

じゃあ、北へ。伊奈帆がスレインの手を引き、振り返る。

目次

平和な世界 2

監獄 4

廃屋 9

海 11

学校 12

遊園地 14

空中庭園 17

灯台 20

アパート 25

海 26

鵜ノ崎海岸 28

世界の底の黒い壁 31

廃屋

あれ。ここはどこだっけ。

スレインはやけに近い天井を見たまま考える。いや、本当に近い。目前に迫る天井は、木目の濃淡までがはっきり見える。見知った独房の天井ではない。では、ここは一体……。

「あ、起きた？」

おはよう、という声が下からして、ベッドの右側に茶髪の頭頂部が現れる。

「や。おはよう」

伊奈帆の顔だ。ベッドの柵に肘を置き、腕に顎を置いている。

「おはよう……？ ああ、そうか」

ここは、二段ベッドの上段だ。

記憶が徐々にはっきりしてくる。極秘施設から出た僕らは、軍用車に乗り込み、北を目指す事にした。そして夜になる頃、山間の集落に着いた。こぢんまりとした古い民家に畑があり、畑にはよく実った作物と風雨に晒され汚れた破れた案山子があった。

人は誰もいない。動物も。生きていた痕跡すら、もはやそこには何もなかった。血も、肉も、骨すらも。アルドノアの暴走は、これほどまでに容赦がない。こんな風に、何も残さず消えるのが、人間の宿業なのだろうか。

被害の少ない民家を借り、子ども部屋らしき部屋を寝床にしたのは日付も変わった深夜だった。スレイン自身は、こんな状況で寝られるわけがないと思ったが、気がついたら朝だった。

「寝られた？」

ベッドの柵の上に腕と顔を乗せたまま伊奈帆が聞く。その顔は眠そうにも、疲れているようにも見えない。淡々とした無表情は、昨日に比べると体調が良さそうだ。

スレインは小さくため息をつき、言葉を探して頭をぼりぼりと搔く。

「どうしたの？」

「お前は……、何というか、変わらないな」

悔しいから絶対に言わないけれど、いつもと変わらぬ顔を見て安心したのは事実。

スレインが起き上がり、降り口に膝をついたの
で、伊奈帆は梯子を降りていく。スレインも梯子に

足と手を掛けた。一足ごとにギシギシと木が軋む音がする。ピュー、と笛のような音が聞こえた。

「お湯が沸いたね。ご飯にしよう」

じゃあ、さっきのピューはやかんの音か。

「ご飯？」

床に立つと伊奈帆が扉の向こうを指差した。

「インスタントだけど。ラーメンとうどん、どっちがいい？」

別にどちらでもいい、とは思うものの。

「……じゃあ、うどん」

数秒思案しスレインはそう答える。それを聞いて伊奈帆が小さく微笑んだので、まあ、悪くないかなと思った。

明るい光が、扉の向こうから差し込んでいる。こちら側の床に四角い光の窓ができていた。先を歩く伊奈帆の踵に影ができた。

「そうでもないよ」

ぼつり、と聞こえた呟きに、視線を上へと移動する。

振り向きざまの橙色と目があう。逆光で表情はよく見えないが、声はこちらを向いていた。

「君がいるから」

どこか切実な響きを伴い、はっきり届く。

僕がいるから？何に対する理由だろうか。伊奈帆は首を振る。

「いや、違うな。君といるから」

「僕といるから？」

僕といるから、なんだというんだ？

待つが、言葉はそれっきり。二人は朝の光と影の間に突っ立ったまま、やかんの湯沸きの音が空気を貫く。

「どういうことだ？」

痺れを切らしてそう聞くと、伊奈帆はゆっくりこちらを見た。

「特別ってこと」

そして笑う。小さく、少し悔しげに。

「？」

「わかんなくていいよ。ほら、こっち」
影を跨いで光を踏む。

海

「よく、わからなかったから」

海風にシャツが風をはらむ。髪が流れ、額が見えた横顔で、界塚伊奈帆は呟いた。海も空も美しく青く、強い風で雲の峰が押しやられている晩夏の真昼。堤防のへりと地面とに地面を分かれ、二人は歩いていった。

何の話だろうか、とスレインは一度頭上を見る。

南国の木の硬そうな葉が箒のように空へと伸びており、その上を雲の流れが通り過ぎる。空の掃除をしているようだ、とスレインは思った。

「知りたいと思った。君のこと」

伊奈帆がまたぼつりと言った。

ああ、そうか。それはかつての問いに対する彼の答えだ。戦後間も無く極秘施設の面会室で、勝者と敗者で取り交わされた会話の一端。

『どうして僕を助けた』

僕は確かにそう聞いた。そしてその時こいつは言った。

『僕じゃない』

「だから、君を探したし、君について色々聞いた。何度も何度も会いに行った」

潮の香りが鼻につく。最初は新鮮だったけれど、よく考えたら僕にとってはいい思い出のない匂いだ。それはこいつのせいだろう。

「……それで？」

伊奈帆が黙り込んだので、スレインは聞いてやっていた。話の続きに興味があった。ずっと不思議だったのだ。この男が、どうして自分に執着するのか。

伊奈帆は堤防の段から地面へジャンプし、スレインの隣に並んだ。歩幅を合わせ、同じ速度で歩き出す。

「おおよそのことはわかったけれど、まだ、あまりよくわからない」

伊奈帆の発する言葉にしては非常に抽象的で曖昧だ。スレインは首を傾げる。

「お前の話がわからない。どういうことだ？」

「君の行動原理についてはわかった。君の事情についてわかった。この場合のわかったって言うのは、この先、その事柄について考えるのを放棄できた、って意味なんだけど」

足元に丸く落ちる影。スニーカーの靴先がそこから出たり入ったり。靴紐が緩んでいて、解けそうになっっていることに気づく。

伊奈帆が足を止めた。スレインは振り向く。伊奈帆が目を上げ二つの眼でこちらを見つめた。

「それで思った。僕にはできない」

何を、が伊奈帆は言わなかった。僕も聞かなかった。二人とも知っているから、言葉にする必要などない。

「だから、やっぱりわからないんだ」

首を振り、伊奈帆は左の眼を左手で覆う。

学校

もう十月だというのに、この暑さはなんだろう。キユ、とバツキンの小気味良い音。冷えた麦茶で満たした3Lの水筒を持ち、伊奈帆は調理場を出た。薄暗い廊下は壁にも床にもところどころヒビがあり、消火栓のランプは沈黙している。曲がり角から渡り廊下へ。強い日差しに、片手で額に影を作る。

廃墟となった高校に滞在し、五日目になる。理由といえば単純で、屋根があり、ベッドがあり、備蓄された水と食糧があるからだ。向かう場所の当てもない。言葉にしないが、もうしばらくはここにいてもいいと思い、今後の話をできずにいる。

『休憩って感じがする』

あれは三日目。夜の食堂で伊奈帆がぼつりとこぼした一言。それにスレインは片眼を細め笑って答えた。

『僕にとっては、ずっとそうだ』

いつから、とは二人にとっては自明のことで、会話はそこで途絶えてしまった。

自身の影を前にして、伊奈帆は渡り廊下から校庭へと進路を変えた。額に汗の玉が浮き、思わず大きく息が漏れる。遮るものがないグラウンド。顎に汗を拭う。

いた。

陽炎の向こう、フェンスの手前。木々の隙間に石造りのベンチがある。そこがここ数日の、スレインの所定の場所だった。日差しが強さに比例した濃い影の中、三人掛けの長椅子の隅に片膝を立て座っている。開いた目は地面の近くをぼんやり見ていて、伊奈帆が近づくのに気がついていないようだった。立てた膝に腕が乗り、足首のあたりで指先が軽く遊んでいる。考え事をしているようだ。

「スレイン」

数歩の距離で名前を呼ぶと、彼はようやく顔を上げた。まん丸くなる猫目の形が可笑しくて、伊奈帆の口元が緩む。

「お茶しない？」

水筒を軽く振ると、中の氷がガラガラと音を立て転がった。スレインは肩を竦めて小さく笑い、左手で隣の座面をポンポン叩く。伊奈帆がそこに腰を下ろすと石のベンチはひんやりしていて心地よい。水筒の蓋にお茶を注いでスレインに渡す。

「お前は？」

「後でいいよ」

スレインは片眉を上げ、麦茶をぐい、と一息に飲み干した。空になった蓋を返し、今度はボトルを持ち上げる。

「注いでやる」

「お酒じゃないから」

「遠慮するな、ほら」

勢いよくカップにお茶が注がれて、溢れそうなところで止まった。表面張力でブルブルしている。

「うわ、わざと？ それとも下手なの？」

「四の五の言うな。僕の酌だぞ」

「だからお酒じゃないし。麦茶だし」

真正面から目があって、ブツ、と同時に吹き出す。お茶が溢れて、スレインの左膝と僕の右膝をビシビシにした。

廃墟となった学校。植物に侵食される校庭の片隅で、まるで学生みたいな軽口の応酬をする一時は。

『僕にとっては、ずっとそうだ』

遊園地

スレインにとっては、あの日から。青い光が世界を暴き、全てが変わったあの日から、一分一秒刹那の全てが余生のようなものなのだろう。

それでも、笑ってくれるなら。僕はそれでいいと思う。

鳶這う鉄橋の先に、円形の建造物が現れた。伊奈帆はその方角に指を向ける。

曇天にも鮮やかな塗装。灰色の海に隣接する遊園地に、青い雨が降り注ぐ。比喩ではなく、本当に青い色がついているのだ。地球上に拡散されたアルドノアの結晶が、雨に溶け入り、世界の姿を急速に変えつつあった。

「見て、観覧車」

大型アトラクションに弾け光る雨の雫がイルミネーションのようにも見えて、伊奈帆の声が弾む。仕草も物言いも普段より子どもっぽいのを自覚した。言われたスレインも、片目を見開くからかい混じりの視線を送ってくる。

「乗りたいのか？」

「動くのならね」

僕の言葉にスレインはくすりと笑う。僕がこの旅で度々思うのは、これが本来の彼なのだろうということ。物静かで大人しいたちではあるが、話しかければ返事をするし、笑うし、冗談だって言う。感情豊かで素直な青年なのだ。そんな姿を、こんな形で見ることになるとは思わなかったけれど。

「動かないと思うけど、行ってみようよ」

スレインは小さく頷く。二人は鉄橋のアーチを骨傘に、地割れだらけの、ジグザグになったセンターラインを辿る。

迫り着いた入場口の柵は、植物の蔓が雁字搦めに巻きついていていた。

「もう、こんなに草木が」

アルドノアの暴走から数日。この短い期間で遊園地の至る所は植物に侵食され、海風の影響からか、錆がひどい。赤茶色に浮き出て、既に剥がれて腐食している部分も目立つ。何十年も前に人足が途絶えたかのような様相を呈していた。

「これじゃあ、もし動いても真つ逆さまだ」

スレインが赤錆だらけの観覧車を眺めて言った。

確かに、この距離から見てもダメージはかなり大きい。

「乗れるもの、あるかな」

看板状のマップを見つつ伊奈帆が呟く。返事がないので隣を見ると、スレインは口を半開きにしてぽかんとしている。

「何？ その顔」

こんな顔は初めて見たな、とよくわからない感慨を抱きつつ聞くと、スレインはぱちくり瞬きをした。ふーん、と唸り腕を組む。

「いや、意外だった。好きなんだな。こういうの」

一瞬だけ、どう答えようか迷った。

さあさあと降る雨に、地面の雑草が青く匂う。起伏するジェットコースターの骨組みが、青い雨にぼうっと光る。

「君は、遊園地、嫌い？」

伊奈帆が聞くと、スレインは微笑みを浮かべ首を振る。

「いや。珍しいし、動かなくても面白そうだ」

その返答にほっとした。

「じゃあ、中に入ってみようよ」

「うん」

色褪せ朽ちた入場門を二人でくぐる。

「駄目みたい」

ジェットコースター乗り場で機械を操作してみたが、生憎反応は無かった。伊奈帆はここに至るまで数箇所にあった発電機と配電盤をいじったが、効果はなかったらしい。

何か一つくらい、乗ってみたかったなと思いつつ伊奈帆が振り向くと。

「え？ 何？」

思わず大きな声が出た。スレインがレールに飛び降り、歩き出そうとしていたからだ。

「ちょっと、あの天辺まで行ってみる」

駆け寄る伊奈帆にスレインはけろっと言い放ち、既に屋根のない場所まで歩を進めている。彼のバックには、角度を増して上昇する蛇のような長く細いレール。鱗のような枕木が連なっていて、それは今雨の光で青白く発光している。

「え？ 本気？ っていうか正気？」

高い声で問う伊奈帆に、スレインはふん、と鼻を鳴らし、不敵に笑う。

「お前、怖いのか？」

「まさか」

即答し、口を噤む。

君が落ちるのが怖い。

という言葉を飲み込んだ。言葉にすれば、それは現実になりそうな気がしたからだ。

大きく息を吐き出して、伊奈帆は乗り込み口の床からレールに飛び降りる。

「競争する？」

軽口を叩くと、スレインがくすぐったそうに笑った。雨に濡れた目元がすっと細くなり。睫毛の先から雫が落ちる。雨で濡れた頬骨に一筋が伝う。

「いいな、それ」

それが涙に見えたなんて、とても言えやしないから。

「冗談だよ。ゆっくり行こう」

伊奈帆はそう言って、先に立ってレールの左を歩き出す。

空中庭園

「薔薇の花が、こんなに……」

一面に生い茂るのは薔薇。赤い薔薇。白い薔薇。

黄色い薔薇。オレンジ色の薔薇もある。しかし青い薔薇はない。うねる茨が巨大な蛇のように床を這い、壁面を伝い天窓に開いた穴から、空を目指すように伸びている。

ドーム状の温室の中央で二人は硝子の向こうを見渡した。階段状のフラワースタンドに咲き誇る薔薇の向こうは、高い位置の雨空だ。

「空中庭園か……」

崩れかけたビルのアルミ製の外階段をわざわざ上ったのは、そこに緑が見えたからだだった。たどり着いた地上約三十五メートルの屋上にあったのは、アンティークな作りの朽ちた温室。

割れたガラスの天井から、ぽつ、ぽつりと雨が当たった。この間までは、真夏の暑さだったのに、と肌を刺す雨の冷たさに驚く。そして雨の光にも。

この雨は、光は人に毒なのだ。
「……あまり、濡れない方がいい」

それを言うのに、ほんの一瞬躊躇ったのは、青い雨の温室を背景に佇む横顔が、あまりに綺麗だったから。

眼差しが注がれるのは、天と地の間。本来ならば、鳥が飛ぶ高さだ。

今、空に飛ぶものは何一つない。

スレインは伊奈帆へ顔を向ける。

「お前だって、濡れてるだろ」

伊奈帆は怖い顔をする。スレインは肩を竦め、彼の横を通り、雨の当たらぬ硝子の下へと。

逃避行は七日目。神話的な数字だが、世界に奇跡は起こらない。人類は滅亡し、生物は息絶え、植物は異様な変貌を遂げている。

僕らは、何から逃げているのだろうか。もう、僕らの敵は誰一人としていないのに。

透明な壁を打つ、青白い雨の飛沫は綺麗だ。光る雫が弾ける様に、伊奈帆は真昼の波打ち際を連想する。

あれは夏。

極秘施設通いもすっかり慣れた頃。外出許可を得て、僕らは海を見に行った。いや。見せに行った。見せたかった。スレインに、真昼の空と海の姿を。

海猫が飛ぶ、青く晴れた空を見た。潮風に頬を晒し、水平線へと目を凝らす。青の境界は鮮烈で。

振り向き様に見た君は、眩しうに空の彼方を睨んでいた。

その瞳には、確かに未来が映っていたと僕は思う。今となつては、一秒先の未来の保障すらないので。

「……不思議だな」

それでも、明日がないという実感は、今になつても湧いてこない。

「うん」

それが不思議だ。

「……お前、適当に返事してないか？」

伊奈帆の即答に、スレインが怪訝な眼差しを向ける。濡れた睫毛が雨の光を照り返していた。

「不思議に思つたのは同じ。君とは別のことに、だけど」

いい加減に返事をしたわけではないが、彼と違うことを考えていたのは事実であるのでそう言つた。

「でも、君の言いたいことはわかる」

「じゃあ、何が不思議なのか言ってみろ」

伊奈帆は、視線を温室の植物へ送る。生き生きとした薔薇や生き物のような茨のくねり、プランター

の掠れたネームプレート。錆びたシャベルと劣化し色褪せたジョウロ。そういうものを通して、ここに至るまでに見てきたものを眺める。

「草や木や、花は平気なんだなあって」

スレインが見て、不思議に思つたに違いないことを確かめる。

「あつてる？」

スレインは、ふん、と鼻を鳴らした。正解らしい。得意な気持ちに一瞬なるが、伊奈帆は小さく首を振る。

「でもそれ、違うんだよ」

どういうことだ、と目が言つた。雨の中、濡れたように見える瞳の色は碧。連想するのは、晴れた海や、極北の夜。永久凍土の断面に、加熱すると弾ける蛍の名を持つ石。ガラスのようなひび割れ模様の瞳の碧は、美しい地球の化石のような色に見える。

比類なく綺麗なものが、損なわれずにここにあって。ほんの少しだけ、自惚れを抱くのはかまわないだろう。この瞳を、失わずにここまで来たこと。そこに映ることを許される自分に。

「平気なわけ、ないんだ。この薔薇も」

雨を浴び、鮮やかに、美しく咲く薔薇の園。しかしこれも、既に済んだ後なのだ。アルドノアの肅清

の。なぜなら、他の植物は薔薇の養分として跡も残さず取り込まれている。

「どんな環境でも、生物は淘汰され、特殊な群落を形成する」

植物も。動物も。人間も。

「ふうん」

スレインはため息のような返答をした。君の方こそ適当じゃないか、と言おうとしたがやめておく。こんな話は、適当に聞き流してほしい。

「雨が止むまでここにしよう」

「傘もないしな」

スレインの切り返しが嬉しくて、伊奈帆は小さく微笑み頷く。

「うん」

雨は降り続けている。青く光る毒の雨が。そういえば、人類を全て洗い流してしまう雨が神話にあった。

「ノアの方舟があれば、人類は生き延びられたかもしれないね」

伊奈帆の言葉に、スレインは可笑しそうに声を出して笑った。肩を揺すり、彼は言う。

「お前、乗るのか？」

彼が笑った理由が分かり、伊奈帆も笑った。

「乗らないかな」

「だろ？ 僕もだ」

地球は、もう、人間のための世界ではない。

そして僕らは、人間からはみ出してしまった形態異常の生体だ。

「乗り損ねたのさ。僕らはもう、人ではないのかもな」

生きた人間に、いまだ一人も出会っていない。それが答えのように思える。

灯台

灰色の世界で、降る雨が雪に変わる。伊奈帆は足元の水たまりを靴で踏む。パシヤ、パシヤ、と軽やかな音にほんの少し心が躍る。足音は地面と、それから胸の高さから。伊奈帆は道路を、スレインは段差のある堤防のへりを歩いていった。スレインの靴は底がすり減り、つま先のゴムは取れない汚れて黒くなっている。二週間で履き古したスニーカー。

昔よく、こういう遊びを一人でやったな、と伊奈帆はゆっくり瞬きをする。横断歩道や敷石の模様、歩道の縁石を辿って歩いて、落ちたらいけないというルール。

スレインも、そういう一人遊びをやったことがあるのかな。

見上げた横顔は、つまらなそうな無表情。しかし突然歩みが止まり、顔には驚きのような表情が広がる。きよろきよろと周囲を見渡すスレインに、どうしたのかと問いかけようとした矢先、スレインの方が口を開いた。

「何だ？ この音」

伊奈帆は耳を澄ます。聞こえるのは、まず、雨音。そして確かに、それ以外の何かが聞こえる。音が遠い。何かの鳴き声にも似たこの音は……。

「警笛だ」

断続的なサイレン。それは、もう絶えたと思っていた人の作り出す音だ。

「人がいるんだ」

スレインが頷く。二人で周囲を見渡した。今の音は、どこから？ 途絶えてしまった音の源を探す。

ボォ——……。

しばらくして、また鳴った。その方角には仄かに光の線が見える。

霧の向こうの果ての岬に、細長い円錐形の建物がある。

「灯台だ。行ってみよう」

この世界に、まだ僕たち以外の人間がいた。その可能性に、僕は水溜まりを踏みしめ駆け出した。

赤いペンキの扉は開いた。一階部分は円形のエントランス。暗く、空気は冷たく湿っていた。金属製の長い螺旋階段に足を掛ける。上っていくと階層があり、貯蔵庫、台所、寝室があった。ドアなど無い

ので部屋の様子が覚えてしまう。調度品や壁紙の感じに、生活感が染み入っていた。

かん、かん、かん、と音が響く。僕が先になり、並んで階段を上る。

そして行き着いたのは小部屋。そこにいたのは老人だ。小振りのテーブルセットにノートを広げ、何か書き物をしていた。ちゃんと生きている。

「こんにちは」

伊奈帆は会釈し、時間差でスレインもそれに倣う。老人は片目を大きく開き、細めた目元に笑みの形で皺が寄る。

「おや。まだ、俺の他に人がいたのか」

「汽笛が聞こえて」

「霧笛、つつうんだ」

白髪に白い髭。日焼けした顔に皺が刻まれている。日本人だ。何歳くらいだろう。細身の身体は背筋が伸び、矍鑠としていた。

「死に損ないのパーティ会場が、こんなしけた灯室とはな」

人を喰った微笑みと飄々とした口ぶりは、灯台守という仕事のイメージとギャップがある。

二人は顔を見合わせた。伊奈帆が口を開く。

「僕らも、そうです。他に、人がいるなんて」

「巡り合わせだな」

あの事故の後、と彼は続けた。

「船はいつとも通らねえ。街の灯りも全部消えた。月も星もかくれんぼだ。みんな、くたばっちゃったんだとばかり」

先程通り過ぎた部屋を思う。人里離れた、最果てにある赤い扉の小さな灯台。

「貴方は、ずっとここに？」

「ああ」

「一人で？」

「ああ」

「どのくらいですか？」

スレインが聞いた。隔絶された場所、という環境が、彼の口をこじ開けたのかもしれない。灯台守は自身の顎を右手で触った。

「もう、五十年になる」

半世紀。たった一人で。

それは今の僕らには、長すぎる時間に思えた。だって、十日足らずのこの旅が、これまでの十年よりも長く感じてしまうのだ。

ボオ——……

笛が鳴る。男が窓の外を見る。そこには黒い波があるだけだ。音が止んでも、しばらく彼は海面を見つめていた。

室内に波音が反響する。高い位置から見る空は重く暗い雲に覆われていて、今にも稲妻が光りそう

だ。

「……あんたらは？」
ずいぶん時間が経った頃、灯台守は僕とスレインを順ぐりに見て聞いた。

「旅をしています」

僕が答える。彼はくしゃりと目を細め笑う。

「旅か。いいねえ」

そう言うのと、遠い目をして海の向こうに顔を向けた。

「俺も昔、旅人だった」

海鳴りが灯台を揺らす。ここを残して、世界は全て崩れ落ちたようにも思える音と揺れ。

ピカッと、稲光が一瞬だけ、僕らの姿を影にした。

「海の上をね。奪って殺して。真っ当じゃない仕事だったが、生きる術をそれしか知らなかったのさ」
スレインの肩が強張る。その肩に触れようと伸びかけた手を僕は戻した。殺す罪と、殺さなかった罪

についてを天秤にかける。そうすると、彼の肩を抱く資格など、僕にはないと思ったからだ。

生きるため、略奪者であつた男が首を振る。

「でも、随分前にやめた」

沈黙が空間を満たす。

男は自嘲するように首を振り、僕らに再び顔を向ける。

「理由を聞いてくれるかい？」

「どうしてですか？」

今度はスレインが聞いた。

灯台守の老人は、満足気に頷いた。そして視線を海へと向ける。

「会いたいやつがいるんだ」

そいつは、嵐の海で溺れる俺を助けてくれた、と言う。

「何もわからない。ただ、俺を引き上げる腕のようなものがあり、身体のだこかに泳ぐためのつくりがあつた」

思い出すような眼差しを、彼は瞼を閉じることで瞳の中に閉じ込める。

「最後に声を聞いたんだ」

その時、ボォ——……、と霧笛が鳴る。なんて寂しい音だろう。永遠の悲しさと命のはかなさを、遠

くへ、遠くへ問いかける。だから僕らもここに来た。

「鳴き声だったのだろう。その声は笛に似ていた。低く細く、世界で最後に取り残された一人の迷子の泣き声のような、どこまでも寂しい笛の音に。その音に言葉はなかったのかもしれない。でも、俺にはこう聞こえた」

ありがとう、と。

彼は切ない眼差しで虚空を見つめた。

「そいつが、どんな生き物だったいい。生きているなら、もう一度会いたい」

また、ボォ——……と灯台が鳴く。

「だから霧笛を鳴らしている」

そうか。これは祈りだ。だからこんなに悲しい気持ちになるのだ。

男は、おどけた素振りですぐ肩を疎める。

「そういうわけで、俺は賊をやめ、しがない灯台守になったのさ」

きつともう、会えるわけがないと知っているのに。それでも、祈らずにはいられないのだ。自分の全てを捧げて。会えない誰かを思い続ける。自分

の人生のほとんどを、一人で暮らし笛を鳴らす。再び会えることだけを願って。

伊奈帆の視線が横へ向く。スレインは、男の手元に視線を落とし、じっと考え込んでいるようだ。

彼らの生き方は、よく似ている。孤独な男の一生だ。失い、手放す。未来すらも。たったひとつの、宝石のような思い出だけを胸にして、死を願いつつ生き続ける。

こんな生き方があるのだ。それを、美しいと思う。守れなくても、せめて隣にいたいと思うのは。わかってる。エゴだ。けれど、それがなんだというのだろう。

僕には彼しかないし、彼には僕しかないのだ。

日に焼けた、皺だらけの大きな手が膝の上で組み合わされる。孤独な男が口を開く。

「あんたら、ここに居るかい？」

「いえ。行くところがあるので」

「そうかい」

そう言う男は音もなく立ち上がり、二人の間を突っ切って、螺旋階段を下りていった。数分後、戻ってきた手にコートを二着と何かの包みを持っていた。

「これを持ってきな」

差し出されたのは撥水性のモッズコート、干物と缶パン、ウイスキーだ。

実は、日を追うごとに空腹を感じ辛くなっていた。それはスレインも同じようで、二人にとって食料は生命維持のためのものではなく、嗜好品になりつつあった。安全な食料を手に入れることも難しくなりつつあったし、肉体の変化は抵抗なく受け入れていた二人だが、食べることが嫌いとかいうわけでは決してない。料理や食事は癒される。雨が続き、北上のためか寒さも厳しくなっている。機能的な防寒具もありがたかった。

しかし、いいのだろうか。限りがあるもののなに。躊躇い、顔を見合わせる伊奈帆とスレインに向け、男は豪快に笑う。

「俺にはもう、必要ない。ここがもう、やられちゃった」

彼は自身の腹を叩く。元気そうに見えるけれど、二人とは違い因子もない。生き延びていたとはいえ、身体に影響がないわけではもちろんないのだ。内臓は弱り、もう食べ物を受け付けられないのだろう。「どうするつもりですか？」

スレインの問いに、男はいたずら小僧のような微笑みを返す。そして、と顎をしゃくる。海の方へ。

「向こうが来ないなら、こっちから行くまでさ」

伊奈帆はスレインを見た。スレインも伊奈帆を同時に見た。

それはつまり、海へ去るということだ。会いたい相手がいるかもしれない、いたに違いない場所へ。

一人の男の決意を、止めることができるものなどないだろう。

ならば、と伊奈帆はコートと包みを受け取る。

「貰います」

「ありがとう」

「じゃあな。よい旅を」

「貴方も」

男は片目を軽く瞑る。真夏の少年のような、若々しい表情だった。

アパート

迂闊にも、言葉を失い立ち尽くした。我に返り、伊奈帆はそのままじっと息を殺して待っていた。黎明が通り過ぎるのを。

古アパートの一室。窓の近くに二脚の椅子が斜向かいに置いてある。間には、西暦の違う新聞の乗った正方形のテーブルが。壁には亀裂。床には染みとへこみがあり、汚れた窓の内側には半分くらいで動かなくなったブラインドの覆いがある。夜から朝へと移り行く。地球の空が縞々模様に切り取られ、冷たく柔い光が室内へと侵食する。

もう二度と、晴れ間などないと思っていた。毎日、雨が降っていたから。

グラデーシヨンの光の中で、窓に近い椅子の方。そこに腰掛け、遠い目をして、窓の外を眺めている彼の姿をもう少し見たいと思ったのだ。髪も肌も、光を透かすようだ。髪が伸びたな、と思う。組んだ足、ズボンの裾のくるぶしの骨の形にどきりとする。横顔の線が鋭くて、近寄りがたい感じがした。向かい合うより横に並ぶことが増え、近頃あまりちゃんと顔を見ていない。

「スレイン」

夕陽のような色に朝日が変わる頃、伊奈帆は彼の名を呼んだ。特に驚いた風もなく、スレインは自然な素振りで伊奈帆の方へ顔を向ける。

「伊奈帆」

手に持っていたカップを一つスレインに渡す。湯気はすっかり消えていた。

「おはよ」

言いつつ、空いた椅子に腰掛ける。スレインは生返事をして、カップの中に視線を落とす。

「どうしたの？」

物憂げな様子は珍しくないが、何かいつもと違うように思えて伊奈帆は問いかけた。スレインの、温くなったコーヒーを包む両手に少し力が込められる。

蒼白な頬の左側に笑窪ができた。

「伊奈帆。朝だ」

予想外の、しかしごくごく当たり前の一言だ。もしこの場に他の人間がいたら、寝ぼけていると思うかもしれない。

「そうだよ」

伊奈帆はそうは思わなかったのだ、彼の言葉に同意を返す。

「うん。そうだ」

スレインは真面目な表情でこくりと頷く。

「ここは地球だ」

そう。地球。地球の廃墟の窓辺の朝。

「そうだね」

伊奈帆もこくりと頷いた。

「地球の朝を、初めて見たわけじゃない。小さい頃も、朝は来た」

でも、とスレインは一度瞼を下ろし言葉を止めた。唇が、ほんの微かに弧を描く。ゆっくりと瞳が現れ、蛍石の色の瞳が真っ直ぐ伊奈帆に向けられた。

「かつての僕なら、世界の見え方は今と全然違っただろうな」

そして、窓の方を向く。筋の目立つ細い腕が窓を開け、ブラインドのプラスチックがカタカタシヤラシヤラ音を立てる。風が吹き込み彼の髪を逆立てた。

「お前がいて良かった」

冷たい風で獅子の鬘のように金糸が靡き、サイズの少し大きな服の背中が大きく膨らむ。

海

天気雨の水平線に日が沈む。夕陽の色で燃えるような空と海。

「ねえ、待って」

波音の狭間に聞こえた伊奈帆の声に振り向いた。僕は海を見ていたが、彼はじっと自分の足元を見ている。

「何だ？」

言いつつ、僕も視線を落とす。波打ち際の砂浜。雨を照り返す白砂には、青く光る僕の残した足跡と、伊奈帆の靴の先がある。伊奈帆はしゃがみ、背中を丸めた。腕を伸ばし、指先を砂に埋める。何かを見つけたらしく、立ち上がった彼の右手、親指と人差し指の間にあったのは、砂のついた小さな白い欠片。親指と同じくらい大きさで、つるりと曲がりしていて先端が尖っている。

「歯だ」

伊奈帆の指が砂を払う。青く濡れた白い曲面が、赤色光を鈍く照り返す。

伊奈帆はその歯を傾けたり、くるくる回したり、興味深そうにいろんな角度で眺めている。そのうち

に空が色を徐々に変え、伊奈帆の顔も砂浜も、乳白色の生き物の歯も、明度の低い薄紫に覆われる。

雨は降り続いている。

人類を洗い流す大洪水は、四〇日の雨ではなかったか。洪水なんてないのに、青い光のこの雨は、たった一〇日で、僕ら以外を消してしまった。

「歯？」

「多分、鮫かな」

やがて伊奈帆は再びしゃがみこみ、元あった場所に尖った海獣の歯を埋めた。

「せっかく見つけたのに、持っていないのか？」

不思議な行動だと思ったので、歩き出す伊奈帆の隣で僕はそう聞いてみた。すると伊奈帆は僕を見て、少し間を置きこう言った。

「なくしたくないから」

小指が触れて、自然に僕は手を繋ぐ。砂の感触がする。さっきまで、打ち上げられて風化した骨を触っていた指だ。指紋の間に砂の粒子が入り込んでさらさらしている。波の音が大きく聞こえ、満ちた海が足を濡らす。辺りは影の境界をなくし、薄い雲の隙間から、数えきれない月の欠片が星のように小さく光る。

あの月に、さっきの歯と同じ形があるだろうか。

「スレイン」

囁くような小声と同時に手が引かれ、かち合った目に星が降りた。僕はその手を力の限り引き寄せ、四つの足は地から離れ、口の中は歯の間まで、生臭い塩の匂いとざらつく砂でいっぱいになった。

鵜ノ崎海岸

行き着いた先。僕らは世界を目の当たりにした。

「伊奈帆……」

「うん」

幹線道路も民家も駅も、緑に飲み込まれ瓦礫と化した北の街。その、浅瀬の広がる夕暮れ時の海岸線。止むことのない雨が光の波紋を描く水面に僕は足を踏み入れる。

「すごい」

スレインが呟く。僕も同じ気持ちだった。雨雲は薄く、隙間から赤光が幾重にも降りる水平線は空よりもずっと輝いていた。

「うん、すごい」

それしか言葉が出ないくらい、素晴らしい光景だった。なんて美しいのだろう。ここに来るために、僕らは歩いてきたのだと。そういう気持ちにさせるような一面の空がそこにあった。

天使の梯子が澄み渡る湖にいくつも降りて、足元の先、鏡面世界の向こう側へと光を送る。

僕は自分の足元を見た。こちらを見上げる自分の顔は楽しげだ。

「上にも下にも空がある」

僕が言うと、スレインがああ、と返事をした。水に映った彼の顔を見ると、頬が綻び目元が細まっているのがわかる。この旅で初めて見る、素の表情だった。

何かに気づき、碧の瞳が空を向く。僕もつられて上を見た。

「雪だ」

雨が雪に変わった。ひらひらと舞う雪の光は、まるで星が降るようだ。鏡面の世界が雪に覆われている。

「世界の終わりって、こんなに綺麗なものなんだな」

どきりとする言い方に、顔をあげてスレインを見る。蒼白な横顔。雪に星に変わりそうな、儂い笑みが浮かんでいた。

「……スレイン」

名前を呼ぶと、僕を見た。死に場所を見つけたような微笑みだ。まるであの時。二人で落ちた夜の浜辺の時のように。

やっと終わる。

やっと死ねる。

それがここで、お前の手ならば悪くない。あの時。

そう、蛍石の双眸が語っていた。

こめかみをたたく指の角度も速さもはつきり覚え
ている。

伊奈帆はたまらない気持ちになった。

「あのさ、スレイン」

スレインは伊奈帆へ目を向けた。そこには怒りも
悲しみも、喜びも安堵もない。透明な表情は粉雪で
さえかき消えそうだ。

「なんだ？」

消えないで。光に溶けてしまわないで。今、心か
らそう思う。

「これから、どうする？」

だから、次を問いかける。

雪が降る。雪が降る。空の星に蓋をして、降る音
すらも水面へ沈め、鏡映しの僕らを覆う。

このまま、化石になってしまえたら。そんな思い
つきも悪くない。君となら。

スレインは首を振る。

「わからない。お前は？」

伊奈帆は開いた手を上に向ける。掌に、雪の光が
落ちて溶ける。雫は手の中で光を失い透明になる。

澄んだ香りは雪と森。ここに、森などないのだけ
れど。

いつか。地球は水と森になる。その時僕らは、要
素の一つになれるだろうか。

でも。その前に。

「スレイン」

伝えておきたいこともある。

神妙な顔になり、言葉を待つスレインに向けて一
歩、二歩、と近づく。足裏が作り出す波紋に、映り
込んだ僕らがぐにやぐにやと揺れる。

「たとえ世界が終わっても。僕らのための世界じゃ
なくても」

あと一足で、手が届く。雪の欠片はぼうつと光
り、揺らぐ動きは青い蛍のようにも見える。

「僕は、君のそばにいたい」

スレインが微かに両目を見開いた。濡れた髪か
ら、光の雫がぼたりと伝う。

フラッシュバックする始まりの部屋。荒んだ顔
で、僕に死を請う瞳の色を覚えていた。

絶望と空虚に満ちた闇がそこにあった。

しかしそこに、光が灯る。

ぼろぼろと。光を覆う闇は涙の雫となって剥がれ
落ちた。

「生きてほしいし、笑ってほしい」

いつか見た、その涙にもしも色があるなら。きっとこんな色だろう。冷たく澄んだ、透明な青。

空を閉じ込めたような、青。もう二度と、僕らが見ることのないレイリー散乱のブルー。

それでもいい。ここにある。涙の色も、涙の理由も知っている。

だから、それを守りたいんだ。

「君はどう？」

手を伸ばす。スレインが僕の左手をじっと見る。

彼の右手の指がびくりと動く。同じ景色を、きっと思い出している。

「僕と一緒にいてくれる？」

夜が迫る。星の見えない果ての海。降る雪が足元の水面を青い光で覆っていく。

青い光を照り返す頬に笑窪ができた。しょうがないな、という風に首が傾く。

「何を今更」

はつきりとした口調とは異なり、躊躇いがちにスレインの手が僕の手に重なる。少し震えるその手を僕は強く握る。冷え切っているが、触れた場所から脈が伝わる。

掴めた命が、確かに今もこの手にある。

スレインが、伏目がちに口を開く。

「どうせ元より、故郷も行く所もない」

腕を引き、引き寄せる。触れ合った耳は冷たい。

心臓の場所が互い違いに少しずれた鼓動を刻む。雨の匂いは清く、亜麻色の髪は青い雫に光っている。

耳の後ろで呼吸の音。喉で笑うのが肩でわかる。肩を抱いてキスをした。濡れた唇は冷たくて、並んだ硬い歯列があり、熱く柔らかな舌があり、喉の奥に吐息がある。

くぐもった笑い声が、二人分の腔内に反響する。

顔を離すと、顰めた眉の悔しそうな笑顔があった。

「お前が死ぬまで、一緒に世界にいてやるよ」

それなら、世界の方が先に死んでくれたらいい。

フロアライトの瞳を見つめそう思い、冷たく濡れた髪を撫でた。

世界の底の黒い壁

救いとは、なんと耳障りの良い、都合のいい言葉だろうか。

界塚伊奈帆はそんなことを考えつつ、通い慣れた極秘施設の、歩き慣れた通路の床に軍靴の踵を硬質に鳴らす。現在位置はまだ地上。等間隔の採光窓。横切る時に境の部分が落とす影が頬に十字を何度も刻む。

この廊下を、歩いた数は僕よりずっと向こうが多い。つまり、彼の頬には僕よりずっと多くの十字の影が通り過ぎたということだ。

煉瓦作りの壁面に、所々ひびがあり、そこにはただ細い黒の隙間がある。このひびは、この先どんな広がり分かれ、いつしか壁を崩すのだろうか。

扉の前。これはまだ、地上と地下、すなわち世界と世界の底の境目だ。刑務官に先導され(そんな必要は今や全く無いのだが)、重厚な扉を通り抜け、一段一段降りてゆく。温度と湿度が次第に変わり、じめついた肌寒さが背筋をぶるりと震わせる。不十分な

照明のもと、見た壁にはまたヒビがある。荒い漆喰に奔る稲妻のような形のひび。

コツ、コツ、と反響する足音が、この隙間に染み入り崩れれば面白い。それには一体、何度通れば足りるのだろうか。

隔絶された世界に通ずるこの道を。

ああ、そうだ。今日はチェスの後、崩れた壁の話をしようか。彼は一体、どんな反応を示すだろう。壁がもしも崩れたら。

そして世界の底に着く。独房の扉を前にして、くすりと一度伊奈帆は笑った。

猫がいる、と言ってくれば、僕も少しは救われる。たとえ亡骸でも。この世界に命の欠片があるのなら、と。

Prologue

Crypt of Omelas I

あとがき

読んでいただきありがとうございます。

本編後の伊奈スレはプリズンブレイクからの逃避行がいいよね、せっかくだから廃墟を巡っていくのを見てみたい、と思ったら世界がちょっと邪魔だったので、私が先に滅ぼしておきました。これがセカイ系かあ（ちょっと違う）。

アルドノアの解釈って色々あると思うんですけど、なんの見返りもなくあんなすごい力を使えるわけがないよなあと個人的には思っているので、このお話では人類の裁定者みたいな意思を持つ存在として設定しています。創世記の大洪水が進行していて、アルドノア因子がノアの方舟のチケットだった、みたいなイメージです。じゃあ軌道騎士とかのアルドノア因子を持った他の人たちはどうなったん？という因子に精神を乗っ取られて新たな生命体になってそれぞれの宇宙に散らばっていきました（皇族は人間に滅ぼされました）（人間は雨にうたれていなくなりました）。地球はアルドノアに見放された惑星で取り残された地球人の話がこの本です。あとがきでこんな重い話をする事になるとはびっくりです。伊奈帆はこのへん全部止められなくて、ほとんど心中のつもりで監獄へやって来たのがお話の始まりです。伊奈帆にとっての世界はもうスレインの中にしかないっていうのが廃墟に希望として浮かび上がってくればいいなあと思いました。

お付き合いいただきありがとうございました。またお会いできますように。

鳴海

イメージソング「ハナウタ (feat.最果タヒ)」 Alexandros

ワンダーラスト

発行 Scramble/鳴海
発行日 2023.2.19/橙とコウモリ 2
印刷所 (株)しまや出版様
Mail jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter @narumiblue
Pixiv ID 955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。